



Title	2008年度 海外調査活動記録
Author(s)	大坪, 慶之; 片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2009, 4, p. 130-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2008 年度 海外調査活動記録

大坪慶之・片山 剛

はじめに

2008 年度は、南京市と広東省で海外調査を実施した（ほかに、連携研究者・濱島敦俊による 11 月の上海調査がある）。南京調査の主目的は、①档案資料の分析結果と江心洲地籍図を活用した現地調査を継続し¹；②1930～40 年代の南京市地政に関する刊行資料や档案資料を収集・分析する；である。広東調査の主目的は、『広東省田畝調査冊』のうち、地図資料が完備しており、かつ関連する文字資料も利用できる高要県白藤岡郷（現在の高要市金利鎮金江村）とその周辺集落で実地調査を行い、集落間関係を解明することである²。

※ なお片山は、2008 年 8 月 26-28 日に台湾花蓮市の国立東華大学で開催された「第二屆現代中国社会變動與東亞新格局」国際学術討論会に出席し、「二十世紀中國大陸的土地調査事業及農村社会」（中国語）と題する研究報告を行った³。

1. 南京調査⁴（8 月 26 日～9 月 12 日）

8 月 26 日（火）【関空発⇒南京着】東方航空 MU534 便

田口宏二郎（追手門学院大学准教授）、大坪慶之（大阪大学特任研究員）の二名が南京に到着。宿舎は中山大廈。夜、南京大学歴史系の夏維中教授・胡正寧氏（歴史系辦公室主任）らと会食し、今回の調査の趣旨説明・協力依頼を行う。

8 月 27 日（水） 第二歴史档案館／南京図書館（ともに南京市玄武区）

午前中、第二歴史档案館へ行き、閲覧の申請手続きを行う。許可が下りるのは翌日とのことであった。その後、2006 年 12 月の資料調査時には、新館への移転中で利用できなかった南京図書館へ行く。所蔵資料の検索を行うも、民国時代の文献の多くは、新館移転に伴う整理が終了していないため「閲覧不可」となっていた。

夕方、南京大学歴史系の范金民・夏維中両教授を訪問し、翌日以降の調査について、打ち合わせを行う。

8 月 28 日（木） 第二歴史档案館／南京大学図書館（南京市鼓楼区）

閲覧許可の下りた第二歴史档案館で、資料調査を行う。午前中は、『国民政府地政部』『国

¹ 江心洲地籍図については、大坪慶之(他)「台湾収集の地形図および地籍図について」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』2, 2007 年, pp.121-140 を、江心洲の現地調査については、大坪慶之・片山剛「2006 年南京市江心洲調査報告」同, pp.141-156 を参照されたい。

² 騰岡郷に関する分析については、片山剛「1930 年代広東省土地調査事業と郷の境界画定—「村の土地」の存否をめぐる—」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』3, 2008 年, pp.31-50 を参照。

³ 提出論文「二十世紀中國大陸における土地調査事業と農村社会」（日本語）は、『第二屆現代中国社会變動與東亞新格局』国際学術討論会 会議手冊&論文集』pp.411-422、発表の中国語要旨は p.99、日本語要旨 pp.100-101 に掲載されている。

⁴ 2008 年南京調査の成果は、2008 年 11 月のワークショップにおける田口宏二郎、大坪慶之、片山剛 3 名の研究報告に反映されている。本ニューズレター所収の 3 名の報告を参照されたい。

民政府地政署』『偽汪内政部』と題された目録から、1930年代の南京市街の地政関係資料、1930～40年代の江心洲・八卦洲に関する档案をリストアップする。ただし、財政部档案（特に登記関係の公文書が含まれる財政部土地局土地登記処）は「不公開」とのことであり、目録を見ることができなかった。

午後、档案の閲覧を開始する。しかし、档案馆が夏季休業期間のため 15:30 に閉館してしまい、不十分な調査に終わる。

夕方、胡正寧主任を訪ね、南京市档案局への紹介状（南京市档案馆・南京市房産档案馆を利用するため）を受け取る。その後、南京大学図書館へ移動し、民国時代の文献の所蔵状況を調べる。その結果、『南京市政府公報』が、ほぼ全巻揃っていることが判明する。

8月29日（金） 南京市档案馆（南京市玄武区）／南京市房産档案馆（南京市鼓楼区）

午前中に、南京市档案局へ行き、南京市档案馆の利用許可を受ける。その後、南京市档案馆へ移り、資料調査を開始する。この日は、2006年12月の調査から持ち越した目録検索のみを行い、1930年代の南京市の不動産登記に関する資料、1930～40年代の江心洲・八卦洲に関係する档案をリストアップする。

午後は、南京市房産档案馆に行く。汪智学氏（房産档案馆初代館長。2001年6月定年退職）から、所蔵する档案の説明を受け、南京城内を対象とした地籍図（1936年刊行）を見せていただく。汪氏は『南京市房産档案馆指南』を執筆し、地籍図をはじめとする地政関係の档案整理に長年携わってきた人物であり、その話は非常に有益であった。

その後、民国時代の档案を保管している別館へ案内していただき、分段図および地籍冊、他項権利関係の冊子を閲覧する。分段図は、台湾の国史館で見たものと同じであり、対象地域は主に南京城内だった。また、他項権利に関する冊子に書かれている情報は、国史館で入手した他項権利存根の記載と一致することが判明した。

夜、南京大学の范金民・夏維中両教授、万朝林副教授らと会食する。

8月30日（土）

文書館が休みのため、南京市内の中華門・太平天国歴史博物館を見学する。また書店にて、地政関連の書籍を搜集する。

8月31日（日） 南京図書館

南京図書館へ行き、資料調査を行う。既に整理済みで「閲覧可」となっている民国文献を見るべく申請するも、土曜・日曜は書庫にある原本の貸し出しはできないとの回答であった。そこで、開架図書に含まれる新編地方志を閲覧する。

9月1日（月） 南京市档案馆

終日、南京市档案馆にて調査を行う。29日にリストアップした档案の中から、田口は1930年代の南京城内における土地登記関係の資料を、大坪は1930～40年代の江心洲・八卦洲に

関する資料を中心に閲覧する。

9月2日（火） 八卦洲（南京市栖霞区）／南京図書館

この日の早朝便（東方航空 MU533 便）で、田口が帰国。残る大坪は、午前中に八卦洲へ行く。八卦洲への訪問は初めてということもあり、八卦洲街道辦事処に近い長江村を中心に散策する。午後は南京図書館へ移動し、民国文献の中から、1930年代の南京市土地行政、40年代の八卦洲開発についての報告書を閲覧する。

夕方、片山剛（大阪大学教授）と稲田清一（甲南大学教授）が南京に到着。范金民教授・夏維中教授らと会食する。

9月3日（水） 南京市档案馆

片山・稲田・大坪の三名は終日、南京市档案馆で1930～40年代の江心洲・九洲・八卦洲に関する档案を申請し、コピーを行う。ただし、コピーできるのは各档案の三分の一以内であるため、コピーできない箇所の筆写に、多くの時間を割くこととなる。

9月4日（木） 南京市房産档案馆／南京大学図書館

午前中は、三名で南京市房産档案馆へ行き、汪智学前館長より房産档案馆の由来、民国期南京における地政関係資料の整理状況等について指南していただく。

午後は、二班に分かれて調査する。片山・大坪の両名は、午前中に引き続き南京市房産档案馆において、1936年刊行の『南京市地籍図』（房産档案馆は『南京市旧地籍図』と題している）を精査する。ただし、コピー・デジカメ撮影はともに不可のため、冊子にある「地籍図説明」の筆写、ならびに各地図の形状に関するメモに没頭する⁵。稲田は、南京大学図書館に移動し、民国期に出版された地政関係の文献を閲覧・コピーする。

夜、南京大学歴史系の陳祖洲教授らと会食する。

9月5日（金） 南京市档案馆

この日の早朝便で、大坪が帰国。残る片山・稲田の両名は終日、南京市档案馆で資料収集を続ける。片山は江心洲38保の永定洲（特に下八股）の開発史および業主・佃農関係に関する有用かつ大部な資料を閲覧し、その筆写に没頭する。稲田は九洲関係の資料を探索・収集する。

夜、南京大学歴史系の陳祖洲教授、夏維中教授とその家族、テムル教授らと会食。

9月6日（土） 江心洲（南京市建邺区）

片山・稲田に、根岸智代（大阪大学大学院博士後期課程、南京大学留学中）が加わり、江心洲で3人の古老を対象とする聞き取り調査を実施した⁶。また、2006年に採訪した万成

⁵ 地籍図の詳細については、大坪慶之「南京市房産档案馆収蔵の民国期地政資料について」（本ニューズレター所収）を参照されたい。

⁶ その調査記録としては、片山剛「2008年南京市江心洲調査記録」（本ニューズレター所収）を参照。

功・趙玉龍・凌明海の3氏にニューズレター2号を差しあげるべく訪れた。2007年に採訪した王立栄・朱遠財の2氏については、王氏には直接会えなかったが、ご家族にニューズレター3号を差しあげた。朱氏は、家族を含めて不在だったため、ニューズレター3号を差しあげる機会を逸した。

9月7日（日）

午前、片山・稲田とも根岸氏から紹介された先鋒書店で、研究課題に関連する書籍を探索・購入する。午後、稲田は南京大学の夏維中教授と面談し、片山は古籍書店へ向かう。

9月8日（月） 南京市档案馆

片山は午前・午後とも市档案馆で活動。稲田は、午前は市档案馆、午後は南京大学に依頼しておいたコピーを受け取ってから市档案馆へ。片山は江心洲関係の資料、稲田は九洑洲関係の資料の複写・筆写を継続する。

9月9日（火） 南京市档案馆

この日の早朝便で、稲田が帰国。残る片山は朝、市房産档案馆を訪問し、汪前館長と翌日午前のアポを取ってから市档案馆へ。午後市档案馆で、江心洲関係の資料の複写・筆写を継続する。

9月10日（水） 南京市房産档案馆／南京市档案馆

午前は、11時まで市房産档案馆の別館で2006年12月に朱海濱氏に閲覧を依頼した档案を、片山が直接に実見した。第一は、冊号107「郊区登記処結束清冊」（『南京市房産档案馆指南』p.57）、第二は、冊号151「郊区登記資料及雑件」（同、p.68）、第三は、冊号196「原南京市地政局冊籍股江心洲各段卷宗実数清單」（同、p.68）である。冊号151については、1枚（2ページ分）だけ複写を頂戴できた。

そのあと、第二歴史档案馆、南京図書館で用を済ませ、午後は郵便局で郵送作業ののち、市档案馆で江心洲関係の資料の複写・筆写を継続する。

9月11日（木） 南京市档案馆

朝、第二歴史档案馆で用を済ませ、そのあとは午前・午後とも市档案馆で、江心洲関係の資料の複写・筆写を継続する。

夜、范金民教授、夏維中教授、胡正寧主任と会食する。

9月12日（金）【南京発⇒関空着】東方航空 MU533 便

片山が帰国し、南京調査の全日程を終了する。

2. 広東省高要市金利鎮調査⁷ (1月3日～1月11日)

1月3日(土)【閑空発⇒広州着】南方航空 CZ764 便

片山剛(大阪大学教授)、荒武達朗(徳島大学准教授)の二名が広州に到着。宿舎は華廈大酒店。広東省社会科学院歴史研究所の陳忠烈研究員(広東省政治協商会議常務委員でもある)と今回の調査について打ち合わせを行う。

1月4日(日)【広州発⇒高要市金利鎮着】

午前には広州市天河区の広州購書中心で研究課題に関連する書籍・地図を購入し、午後2時、片山・荒武・陳忠烈の3名が高要市金利鎮に向けて広州を出発。金利鎮での宿舎は恒大酒店。到着後、金利鎮委員会の黄麗英委員および金利鎮政府の辦公室主任と5日以降の活動について打ち合わせを行い、今回の調査の目的・方法について説明したあと、夕刻に西江沿いの天后廟と金安大堤を参観する。

夜、黄委員・辦公室主任と会食。

1月5日(月) 金利鎮政府

午前、金利鎮政府を訪問。金利鎮の鄧宏安副書記、黄麗英委員、高要市外事僑務局の謝応仲副局長等から、金利鎮の概況説明を受ける。そのあと7名の退職幹部、李德才(元鎮長)、陸日開(元水利会主任)、黄明子(元電排灌溉工人)、林富榮(元副鎮長)、林朗忠(元鎮長)、黄細昌、鄧桐光から、治水・水利関係の歴史と現状に関するレクチャーを受ける。

昼食後も、黄細昌、陸日開、黄明子、林朗忠の4氏から短時間のレクチャーを受ける。

3時過ぎ、鎮政府での活動を終え、金利鎮の西隣の蜆岡鎮の参観に向かう。蜆岡鎮からの帰路に、今回は訪問機会のない金利鎮の梓里村や西圉村を参観する。

1月6日(火) 金利鎮金江村民委員会

午前・午後とも金江村で古老を採訪する。金江村の旧名は、白藤岡、騰岡、騰江である。当日は、たまたま金江村支部の謝国洪書記の子息の結婚披露宴があり、これも見学する。

1月7日(水) 金利鎮金一村村民委員会

午前・午後とも金一村村民委員会の古老を採訪する。金一村委は一甲村と二甲村の2つの自然村から成る。午前には金一村委の会議室で、昼食後は恒大酒店の片山の部屋で採訪。3時すぎに再度村委の会議室で古老1人を採訪したのち、陸雪桂氏の案内で、一甲村・二甲村・金江村の境界付近を参観する。

この日午後2時すぎに荒武が金利鎮での調査を終え、帰国のため広州へ向かう。

1月8日(木) 金利鎮金二村民委員会

午前・午後とも金二村民委員会の古老を採訪する。金二村委は三甲村と四甲村の2つの

⁷ その調査記録として、片山剛「2009年高要市金利鎮調査記録」(本ニューズレター所収)、参照。

自然村から成るが、採訪のために集まってくれた古老はすべて三甲村所属の方であった。午前には三甲村の黄氏祠堂で、昼食後は恒大酒店の片山の部屋で採訪。3時すぎから黄維武氏の案内で、二甲村・三甲村・金江村の境界付近を参観する。

この日、荒武が南方航空 CZ389 便で帰国。

1月9日（金） 金利鎮金江村民委員会／東圍（墨江）村民委員会

午前、金江村民委員会を再訪し、謝少初氏から簡単な聞き取りをしたあと、同氏の案内で金江村の集落に近在する複数の“塋ラン”について、その位置関係を1934年作製の白藤岡郷絵図と対照しながら実地踏査する。

金江村での調査を終え、西江沿いに大堤の道路を南下し、東慶村、振星村（旧淳宣村）、旧金洲墟を経て、北に金東圍、南に南岸圍を見ながら西進し、墨江村を東に見ながら北上し、最終的には金東圍を一周して、昼過ぎに金利鎮に戻って昼食を摂る。一甲村から六甲村および金江村などの領域となっている金東圍北半の農地の景観が、比較的小さい“塋ラン”が多数あり、クリーク・魚塘などの水面面積も多いのに対して、墨江村などの金東圍南半の農地の景観が、農地改造された平坦な農地が多く、クリーク・魚塘などの水面面積が少なくことに気づく（墨江村での聞き取り参照）。

午後、東圍（墨江）村民委員会で二人の老農民を短時間採訪する。

夕刻、墨江村での調査を終了し、金利鎮に戻ったのち、広州へ向けて出発。夜7時に広州での宿舎華廈大酒店に帰着。

1月10日（土） 華南農業大学

午前、華南農業大学を訪問し、彭世煥教授等の招聘を受けて、今回の調査の成果について「村庄と土地開発的關係」と題して講演を行い、研究交流を行う。昼に同大学内で会食。

午後、再度天河区の広州購書中心で関連書籍を購入。

夕刻、陳忠烈氏と調査の総括を行い、会食する。

1月11日（日）【広州発⇒関空着】南方航空 CZ389 便

片山が帰国する。

おわりに

本年度は、南京調査では、1936年刊行の南京市街を主対象とする地籍図を実見することができ、広東の高要市金利鎮調査では、古老からの聞き取りで、解放前夜まで「村の土地」が、また「団体としての村」が実在していたことをつきとめるなど、大きな成果をあげることができた。金利鎮については、今後も採訪調査による成果が期待でき、また南京市・広東省ともに、いまだ十分に調査しきれていない膨大な文献資料が存在する。本研究課題は今年度が最終年度であるが、今後も研究資金を獲得して、その継続を図ることにしたい。